

# 臨床社会学の方法

## (10) サイレンシング (沈黙化作用)

—語られていないこと・語りえないものがあることへの配慮—

中村 正

### 1. 語られたことの外部

児童自立・児童養護にかかわり子どもたちが自らの生育歴を把握し、物語ることでできる作業としてライフストーリーワークがあり、そのことから学ぶことが多かった。どんな施設や制度であれ、本人情報の記録の保存と所有の保障が基本である。それをもとに自己物語として編み上げ、一貫した自分の人生として意味づけていくことができるかどうかが大切となる。社会的養護の子どもだけではなく、たとえば不妊治療の進展、養子縁組の事例、離婚や再婚による親子関係の変化、何らかの事情で血縁的な親子関係が切れていく場合等として、ライフストーリーワークの応用範囲は拡大しているが、基礎は個人情報とは何か、それが相当の期間、保持され、それへのアクセスがきちんと保障されているかどうかである。これらの課題について不妊

治療について日本は匿名主義という別の原則があり、自らにかかわる情報にアクセスできない社会のあり方が再編すべき課題となっている。

ライフストーリーワークは事実としての情報の保存だけではなく、人生の意味づけをも含む広い作業を意味する。意味づける作業はその人独自のものである。多くの場合、既製の言葉や定義からこぼれ落ちる現実を生きていて、時には言葉にならないから問題行動化する。そうした経験の総体を説明できないこともあり、語られていないことや語りがたいこと、語る側のいろんな躊躇や隠蔽もあることに思いを馳せておく必要がある。

また、聴く側の了解の幅が狭いかも知れないこと（聴く力が及ばないこと）、そして社会の側がつくるあるいは期待する物語化の文脈があること等、ナラティブにまつわるこれらの「せめぎ合い」があることを意識しておく

べきだろう。

そうしないと、語られた事以外を排除することになる。相互の了解の世界だけでは閉じた対話となり、理解しあったようにみえる、つまり何かを排除した上で成り立つ、「共謀するモノログ世界」に陥るかも知れないという不安が常につきまとう。ナラティブアプローチへの関心は「複数の声(多声的なもの)」を大切にすることを意味するので、沈黙の考慮は必然的な要請でもある。ナラティブ研究はこうした外部への、つまり語られていないこと、語りにくいことがあることを前提にする。もちろん言語化の外部ははかり知れない面もあるが、少なくともここで扱うサイレンシングを視野に入れ、社会が用意している物語化の文脈について承知しておくことは大切だと考える。その語りの言葉で用いられる言葉や概念それ自体がすでにそうであり、すでに社会の手垢にまみれた既製品でしかないと思うことも必要だと考える。

可視化されているライフストーリーワークは以下に述べていくサイレンシングの渦をとおして表面化したものだと考えると、問題にまみれた物語をとおして、問題と解決の歴史(これをシステム療法論では「問題トーク」という)だけを見るのではなく、活性化できていないものがあるとも考えることもできる。相互作用をとおしてみえるようになっただけのことであり、埋もれた歴史が自分のなかにあると気づくこともストレンクス(強み)の発見になる。沈黙は豊穡さでもある。とりわけ逸脱行動や問題行動の渦中にいた人たちとの対話からはそうしたことがみえてくる。「悪

のドラマ化、逸脱の可視化」という作用のなかにあるのが社会病理の対象者なので、そうではない面が、語られていないこと、語りにくいことに注目することで見いだされる。ナラティブとサイレンス・サイレンシングは相補的な関係にあり、可能なかぎり沈黙のなかにあることを言葉にしていく協働作業として臨床や対人援助が成立する。

## 2. 不登校経験者の発言を聴いて

たとえば不登校問題がある。本マガジンの執筆者でもあり、認定フリースクール「アウラ学びの森」を主宰されている北村さんに招かれて不登校の生徒たちが発言した公開ラウンドテーブルに出席したことがある(その模様は同スクールのホームページにリンクされていて概要を視聴できる)。そこで感じたことはたくさんあったがそのうちの一つがこのサイレンスとサイレンシングにかかわるものだ。端的にいえばその言葉である。不登校という言葉は幾多の変遷の結果たどり着いた包括的なものである。長期欠席・不就学、学校恐怖症、登校拒否、不登校へと定義は変容してきた。共通していることは、再登校を目指している点である。行きたくても行けない事態があるのだからそうした因果において「問題定義と解決方法」をセットにすることも理解はできる。

しかし同時に、学習を持続させる方策が講じられて、学習者としての主体が構成されていき、そのための場、機会そして資源の保障が大切だという点に着目すると、児童・生徒

中心の見方ができるはずだ。換言すれば、「不登校児童・生徒」は現実の総体を把握した言葉ではなく、学習者としてみればまた別様のアプローチもできることになる。不登校経験も含めてその子らは学び続けている。そうするとまた異なる名付けがある。不登校という言葉では語られていないことの方が多いことを生徒たちは語った。その意味づけの外部の世界は豊かである。

この「問題定義と解決方法のセット」のあり方を再検討することはシステム変更を意味する。再登校・再適応だけに収斂させない解法を社会が有するべきだと思う。確かに学校に行かないことは少数派であり、逸脱的である。しかしそれを問題としてとらえ、矯正・更正の対象とするのではなく、その逸脱性にあわせてシステムの更新を行うアプローチを採ると、選択肢の拡大、定義の再構築、制度の更新・革新へと至る。具体的には、学校だけではない学びの場の創出や持続的な学習者としての成長の保障を検討していけば、システムは寛容になる。たとえば認定フリースクールの整備、個人別学習支援、ホームエデュケーションの認知と活用、学びのバウチャー制度（学習者が自由に機会と場所を選択して教育サービスを購入できる仕組み）、到達度検証試験制度によるアクセス保障等を創出し、主流の学校システムに接ぎ木する。これはシステムの柔軟化となり、学習者主体の多様な学びのニーズに応答できる。

何かを問題だと定義して当該のシステムの内部で解法を求めるだけだとそれは単なる適応や順応でしかない。社会臨床論としてはそ

のシステムの更新を考える。まずはそれを語る語彙、文脈、定義の再検討を行う。言葉や定義も枠を広げないと解法や実践も豊かにならないからである。主流となった問題の定義や逸脱を語る言葉だけではなお語り得ない、語りにくい、語られないこと、つまりそこには外部、沈黙がある。さらに語り方も既製品のように主流となっているモードに依拠するとその沈黙のなかにある可能性を切り捨ててしまうことになる。

### 3. DV におけるサイレンシングについての研究

#### 1) 暴力とサイレンシング

対人暴力の多くは以前からあったが、社会問題としての公的な関心や認知が遅くなるのはサイレンシングの効果である。具体的には、加害者が暴力の一環として押しつける被害の縮小や否定、社会の側がそれに荷担することになる DV への無理解、さらに常識あるいは既存の制度がもつ二次加害的側面もある。夫婦間、親子間の暴力について、加害が自らの行為を否認するだけではなく逆に被害を非難し、沈黙させようとして動員する社会の意識や制度の総体を把握しようとする言葉が暴力にかかわるサイレンシングである。

暴力や虐待を振るう加害男性の話を聴いていると、暴力の中和化・正当化、女性が怒らせたという被害者非難、家族は私的領域であるので介入すべきでないという意識等がでてくる。さらに被害者もそこに巻き込まれて同調することがある。その過程の総体がサイ

レンシングである。その結果、親密な関係性や家庭内での暴力は見えにくくなる。暴力が広がっているにもかかわらず被害女性からの報告が少ないことにもその効果が示されている。

暴力には初期介入が効果的であるが、それが萌芽的であればあるほど公的機関も含めて気づきが欠如し、サイレンシングが効果を發揮して隠蔽されていく。しかし友人や家族は暴力に気づいているし、相談することもある。警察には被害者は連絡していない。相談するのが公的機関ではなく身近な人たちなので周囲の理解、つまり聴く力が大切となる。逆に言えば、サイレンシングの対象は周囲の人たちにも拡大されていくことになる。

こうしたサイレンシングに注目すると、単に被害者が声を出しにくいということだけではなく、社会の無理解がその沈黙を加速させる面がみえてくる。友人関係、親子関係、夫婦関係、恋人関係等、問題をはらむ関係性から離脱しにくいこともサイレンシングに荷担する。暴力を秘密にしておくように強いられるという性質がこれらの暴力の一つの特徴となる。被害者が声を出しにくいことと周囲の者へシグナルを出していることを重ねると、無関心や無理解をなくすこともサイレンシングへの対抗となる。

この周囲の者とかかわるサイレンシングは「沈黙する傍観者」として議論されてきた論点である。この定式化のもととなった事件はニューヨークで起こった。複数の近隣住民が目撃していた殺人事件だが、救出するどころか誰も通報さえしなかったという。誰かがや

るだろうという判断を相互にしたので冷淡な傍観者ともいわれた(A.ローゼンタール著『38人の沈黙する傍観者-キティ・ジェノヴィーズ事件の真相』青土社、2011年)。同じようにしていじめ事件でも傍観者の存在は指摘されてきた。被害者が声をだしやすくするために周囲の者のサイレンスをどうしていくのかは重要な課題となる意味がわかる。

## 2) 暴力の沈黙についての矛盾

しかし徐々に事態は変化し、親密な関係性における暴力が社会問題とされつつある。家族に暴力を振るう男性への批判が高まる社会のなかでいかにしてそれを隠蔽し続けるのか。より巧妙になるのだろうか。それを隠し続ける努力としてのサイレンシングの詳細を観察することをとおして脱暴力のための資源として活かすことができる。犯罪に否認はつきものだが、この種の対人暴力は一定の関係性において発生するので、そこに根ざした正当化や中和化の微細な語彙と文脈を採取し、更生に役立てることができるだろう。そして何よりも社会のもつ暴力の容認や寛容さがそのサイレンシング過程に透視されることになるので、啓発・防止にも資する。

## 3) 男性が沈黙をおしつける過程の詳細

18人のDV男性のインタビュー調査をサイレンシングの観点からまとめた調査研究がある (Silencing talk of men's violence towards women, by Alison Towns, Peter Adams, Nicoka Gabey in *Discourse and*

*Silencing*, edited by Lynn Thiesmeyer, John Benjamine Publishing Company, 2003) 。これを簡単に紹介しておこう。

暴力を振るう男性は自らが暴力夫だといわれるのを回避するためにその暴力を否定する努力を重ねる。まず男性の暴力の定義が異なる。平手打ちすることと拳骨で殴ることは違うといい、平手打ち程度は限度内だと考えている。他の男性と比べてまだましな方だと暴力を否定する。そして、ろくでなしの奴らの暴力と自分の暴力は違うと言い訳する。自分の暴力は常態ではないこと、たまたまその日はコントロールできなかったという。どうしてそうなったのだろうかと問い、そうさせた妻にも原因があると責任転嫁する。そして殴ったのは数回程度の暴力だったと過小評価する。個人のなかで勝手につくった暴力のヒエラルヒーをもとに判断している。この一覧表は男性同士の暴力をもとにしていてと筆者は想定する。殺人に至るような暴力的な男性と比べての独断的な一覧表だろう。そしてこれ以上、暴力を語らないし、暴力を説明する言葉も欠如している。思考停止状態だといえるだろう。

#### 4) サイレンシングの特徴として

男性の側の暴力のサイレンシング過程をまとめると、第1に、サイレンシングには相当な努力があるので主体的で意図的であるといえる。親密な関係性における暴力を社会問題として扱う社会なのでそれを隠し、否認するには決意がある。

また、サイレンシング過程に妻も同意して

いるという幻想を保持している。「家のなかのことは絶対に他には話さないものさ」という。しかも外ではいい顔をする。だからその内外の落差を埋めるためにサイレンシング行動は能動的となる。

第2に、暴力を振るう男性は自身を「合理的な男」だと思っている。妻がいつもヒステリックだといい、感情に生きているが自分は異なると言い張る。私はそれに対処してきたのだと暴力夫は言い張り、事件はいつも彼女が感情的になるから起こるのだと説明する。警察の前では理路整然と説明し、自分は理性的で合理的だと印象づける。感情的になるのは女性の方であり、暴力へと昂じていくが、その暴力は家庭内の論争の延長線上にあり、自分はそうした事態になることは理性的によくわっているつもりだが、妻がヒステリックに騒ぐからそうせざるを得ない面があるのだと言う。

第3に、説明がつかないことを覆い隠すという矛盾がある。一方では、彼女が怒りを増幅させたといいながら、他方では、暴力を振るうことは恥ずかしいことだと思っている。恥ずかしいことだから隠す。男性として強はずの自分が暴力を振るってしまったという意識である。弱い者へのいじめと変わらないと内心では思っている。社会的にも受け入れられないことだ。こんな男性は男らしくない。男らしいと思って振るう暴力が男性の自己否定につながっている。暴力をふるってしまったことと社会的な言い訳の説明と矛盾する。そこで用いられるのが自己にむかうサイレンシング、つまり自ら押し黙ることである。

根本の矛盾を覆い隠すためであり、アイデンティティを保つためである。この矛盾した意識を支えているのが、強さとしての沈黙の文化である。男らしさが寡黙さと重なる。暴力のことを誰かに相談するとそれは弱さの証明になってしまい、マッチョ・イメージに傷がつくと考えている。暴力は男性の特性でもあるが、それが親密な関係性における暴力としては弱さの証明ともなる。このセルフサイレンシングという選択は余計に都合がいい。こうして言葉が欠如していく。そうするとますます感情が鈍磨していく。言葉がないと感情が構成されないからである。失感情症的な男性の心理と重なる。

さらに被害者もまたサイレンシングに巻き込まれる。暴力で悩んでいると第三者に話すのは裏切りであると思わされている。そして女性の罪意識に訴える。これは沈黙を強いることでもあり、暴力の原因についての曖昧化として機能する。背景にあるのはジェンダー意識だ。「女性は癒す人、男性は傷ついた王子様」という調子である。暴力はその癒やし方が足りないからだといわれる。さらに男性が暴力で受ける社会的な制裁の弱さが暴力の曖昧さを構成する。

この被害者へのサイレンシングは巧妙だ。彼女が暴力を促進させたといい、それは挑発であり、誘発のボタンを押したのは妻であるという。そこで動員されているのは、「男性は機械」というメタファーである。瞬間湯沸かし器にたとえることも同じような男性機械論である。本来は自らの意思をもって関係性に臨んでいるのだから、暴力への責任は自己

に帰属するはずだが、関係性に帰責させるとそれは両方の責任となってしまう。この関係性意識を変えるには社会のジェンダー意識や役割意識の変更が必要になる。社会臨床的なテーマであるゆえんである。

さらに、命題風の言明をもちだす「打ち切り」というサイレンシング行動がある。たとえば、そうした暴力は「自明で、あたりまえのことさ。それはそういうもんだ、そうに決まっている」等の言葉で会話をしない方策をとる。これもサイレンシング作用である。

また、「コップのなかの嵐」であるとし、暴力への相手の関心を矮小化し、些細なことだとする。些細なことにこだわる女性が問題だという。女性への侮辱でもある。妻の行動は子どもじみているという言い方となる。そんな細かなことにこだわり、文句をいうのは成熟していない、非合理的な、メンタルにおかしい証拠であるという言い方もある。

そして、友人や家族をサイレンシングに駆り立てることもある。たとえば、暴力についての「曖昧な会話」というのがある。暴力を振るう男性はもっともらしいことをいう。妻の目の周囲にアザがあり、時には骨を折っていることもあるが、そのことを第三者に説明する時、「転んだ」と言うだけである。あまり詳細を説明せずに聞き手の質問をひきだすのだ。あいまいにこたえながら自分相手の推測に依拠し、頭が真っ白でよくわからなかったと逃げてしまい、何が起こったのかと聴き手に意識させる。まるで酔っ払っての悪態と同じで無意識下の過失だといわんばかりである。

他にも、これは関係性の問題だ、男性の家は城だ（私的な領域という意識の表現）、家の恥を外に出すな等というサイレンシングのやり方が指摘されている。

#### 4. 関係性の病理

ここでの対人暴力は、怒り、恨み、嫉み、鬱憤、甘え、依存をもとにした親密な関係性における暴力である。サイレンシングを加速させるのは「関係性の病理」である。それは多様なかたちをとる。バータードウーマン症候群（DVを受け続け来た女性の心理的特徴嗜癖的な関係性）、バタードチャイルド症候群、特定の事項への反応としての激怒型暴力（思うようにならない道路事情や周囲のドライバーへの運転中の激怒が典型的。さらにヘイトスピーチにみられる憎悪的激怒も同型的だろう）、抑制不能な性的ファンタジーとその行動化としての性犯罪（同様に性的存在としてのみ女性を意味づける意図的な行動）、代理ミュンヒハウゼン症候群（母性の歪み）、嬰兒殺しの心理（産後うつが悪化による破壊的衝動等）、性的虐待を受けてきた人に見られる性化問題行動、歪められた愛着とトラウマ的な絆の形成、長く監禁された心理としてのストックホルム症候群、相手を貶めていくモラルハラスメント（ガスライティングともいう）等として散見される事態である。加害者臨床はこうした関係性の病理を見据えつつも、当の個人の内的問題に対応することになるが、動機付けからはじめなければならず、関係性の歴史や連鎖もあり、長期にわた

る変化を見通さなければならない。

さらに社会臨床的な課題も加わる「構造的暴力」という面もあり、特定の相互作用を生み出す基盤として社会構造がある。また、暴力は相手が悪いのでそれを糺すための正義であり、愛情の証しでもあるし、コミュニケーションの一手段であるにとらえているのは加害者だけではなく社会そのものである。加害者はそれを濃縮し、養分のように吸収して暴力をふるうことを正当化している。暴力加害はそうした社会の暴力を可視化させた象徴でもある。暴力を振るう人たちは、否認的であり、他罰的であり、許容できる暴力だという。

そして認知の仕方が独特である。その行動の特性は、親密な家族関係をとおして構成されていく。とくに夫婦、親子、恋人という非対称な関係性に根ざしている。互いに訴求する関係性、生活を維持しようとする特性、対になって生き延びる戦略をつくる間柄である。その特性に相応しい形態で暴力が懐胎する。

もちろん非対称な関係性はアタッチメントの基礎ともなるが、被害-加害をも宿らせるという両義性をもつ。間歇的に暴力が発生し、関係性の壁に入り込み、時には被害者が自己を責めることもある。こうした関係性であることを踏まえて加害者臨床を行う。認知行動面の変容を促し、暴力へと至る人生の経過を聴き、贖罪のための語彙と文脈を構成することに寄り添い、更生と規範の確立を支援する。脱暴力のための加害者臨床に有効なものはずべて用いるしかない。

## 5. 抑うつとサイレンシングの関係について

さらにサイレンシング研究は疾病のジェンダーの領域でも議論されている。性差医学という領域があり、性差のある病気を扱う。うつ病相しか示さない単極性うつ病と躁うつ両方を示す双極性障害(躁うつ病)のなかでも男女差がはっきりしている単極性にこの性差が確認できる。概ね女性は男性の2倍程度の罹患率とされる。自己を沈黙させる病と位置づけた医療の人類学的、社会学的な研究がある。サイレンシングの研究として対象となってきた。他にも、病と沈黙の関係について、抑うつと自己沈黙等が扱われる。予防、セルフケア、病からの回復、HIV/AIDS、がん、摂食障害、心疾患との関連等も指摘されている。たとえば世界各地のうつ病についての医療人類学、社会学研究者が著した *Silencing the self across cultures: depression and gender in the social world*(Oxford University press,2010)。編者であるDana C.JackとAlisha Aliは、ネパールの精神科外来での経験をもとにしたアプローチを紹介しているので要約して紹介しておく(以下はこの書物のイントロダクション、Culture, Self-silencing, and Depression: A Contextual-Relational Perspectiveの紹介である)。ネパールでは、家族関係への拘束、伝統的な義務への拘束、スピリチュアルなものへの強いつながり、罣や自己欺瞞との闘い、恥・怒りの感情と自暴自棄の傾向が重なる文化拘束的な病という側

面を無視できないとし、その中核にサイレンシングを位置づけている。

男性中心社会において感じる女性の感情でもあり、ジェンダー作用でもあるという。さらに筆者の社会臨床論とも近似しており、ジェンダーの非対称性のラインに即して女性性と不可分に発現する。ジェンダー作用からすると、サイレンシングの結果の自己沈黙は、あらかじめ規範、価値、イメージによって処方されているという。気持ちよさ、利己的ではないこと、愛情を抱いていることなどの女性像に束縛されるとする。自己モニタリングによる否定的な自己評価、文化が期待すべき像と自己実現との葛藤が女性のうつ病にはみられるという。これらは女性患者のナラティブをとおしてデータが採取されている。別言すれば、他者のニーズにあわせて自己をみること、自己表出を監視する、怒りを抑制する、自立的な行動を控える、文化が期待する女性像に抗した判断をしない特性の分析が取り出されている。これらの女性性は抑うつへの脆弱性をつくる。

さらに社会的不平等がかさなり自己非難的なことも加速し、抑うつへとかりたてられる。自己沈黙についての現象学的で行動的な局面の定式化を展開したスケールを開発して尺度化して研究と臨床をすすめている。

これらをまとめると、第1に、外在化された自己認知・自己知覚がある。外的な基準によって自己をみるスキーマができています。他者が私をどうみているのかという視点から自分を見る傾向である。サイレンシング尺度では自らの基準では自分を評価しないことやそ

の基準を取り出している。

第 2 に、自己犠牲としてのケアの視点がある。自己よりも他者のニーズを前景化させる傾向をおしはかる。愛する人たちのニーズと同じほど自らのニーズを考えることは利己的だと思ふという質問である。関係のなかのヒエラルヒーとしてのニーズの優劣をつける。そうすることが自らの道徳だと言い聞かせ、怒りを抑圧する。他者と同じようにそれ自体で価値があるというのではない低い自己評価のもととなる。自己犠牲と母性の密接さをはかる質問もある。

第 3 に、自己沈黙（セルフ・サイレンシング）である。関係を維持するために、喪失や報復を回避しようとして、自己表出や行動を抑制する様相をとりだしている。相方のニーズや感情と私のそれらが衝突するときにはひきさがる。身近なひととのトラブルの原因となるので自らの感情を葬ることがある。

第 4 に、分裂した自己がある。外部にみせる偽りの自己と隠された感情と思考をもつ内なる自己の分裂である。前者は相方の希望に即したものである。

さらにこうした特性をいくつかの女性サブグループで検証している。たとえば、女子大学生、薬物依存の母親、DV 被害女性の各集団である。最後の集団がもっとも高いサイレンシングの効果を示したと報告している。こうしたサイレンシング研究は、性差というよりもジェンダー差を示している。サイレンシングの応用である。

そうすると、男性の沈黙の研究も必要ではないかと筆者は思う。ジェンダー差の他方の

極にあるテーマである。男性のもつ集団としての特権とかかわり沈黙することの意味が男性では異なると思う。サイレンシング研究で男性の沈黙は、他者との距離化、相互作用のコントロール目的、自律を防御することの意味が強いと指摘されている。先述したセルフサイレンシングの選択と男性性の防御との関連に近いものだろう。別に紹介するが、男性性ととうつの研究、男性の暴力の背後にある言語化の貧しさと感情の麻痺、そこから派生する行動化としての暴力等はサイレンシングとかかわるテーマ群である。

## 6. 社会が用意し、期待する「悪のドラマ化、選択の賛美、不幸の逆恨み」という物語化を超えて「複数の声を聴く」

インタビュー調査であれ、自己語りであれ、ナラティブとして表出されるのは物語として編集されたものである。現在を起点にして未来へと向かうために過去が編纂される面がある。やはり人は選択したことの肯定的な意味づけをしたがる傾向（選択の賛美）もそのナラティブには反映される。物語のもつ構成的側面である。

選択しなかったこと、想像しえなかったことがたくさんあり、また、ある言葉を選択した段階で、文脈にその言葉をおいた段階で、ある外部が作りだされる。たとえば不登校やひきこもり、非行や犯罪、暴力の経過等に焦点をあてればその物語は逸脱の物語となる。これを悪のドラマ化という。現在の不満は過

去との因果関係の連鎖におかれる。これは犯人捜しの物語、不幸の逆恨みである。

ナラティブが複数の声として主流の物語化を相対化することとは別に、こうした物語化のコードがあり、そのラインに即してナラティブ化されていくこともある。

また、ナラティブの基盤にかかわり、自分についての情報は自己所有すべきだというのがライフストーリーワークの基本視点である。出自についての情報が断片化しやすいとそれは脆弱さとなり自己物語においてはハンディとなる。社会的養護、不妊治療の結果、養子縁組の子どもたち等は自己についての情報が断片化されやすい。制度がつくり出すサイレンシングといえる。匿名のなかへと沈黙させられていく。精子や卵子の提供による不妊治療、産みの親の関係を匿名にする養子等がサイレンシングを促進させる。児童養護・児童自立における情報保存も整備が遅れている。

これらは自己とは誰なのかについて基本的情報のことなので、文字通りの意味での権利擁護(アドボカシー)、民主主義や価値の実現ともいえる。

また、暴力にまつわるサイレンシングは沈黙を強いる面をとらえようとしたものだ。対人暴力が被害者をいかにして服従させていくメカニズムを把握できる。いじめ、ハラスメントへと広がる暴力や社会的差別にも応用していくとその非抑圧性がみえてくる。そのことを教えてくれたのは非識字運動の理論化を基礎づけた「沈黙の文化」論(パウロ・フレイレ)である(『被抑圧者の教育学』叢書房、2011年)。非識字者の生きる世界は文字を持

たないがゆえに体験する苦痛であり、沈黙のなかにあるという。非識字という事態は自らの置かれた事態を表現し、理解しにくくさせる効果をもつ。ということは、識字をとおして自己への理解や自己の現状への意味が理解できていくようにする必要がある。このフレイレのアプローチは、識字を運動として把握し、その概念を一新させた。識字は文字を学ぶことをとおして文字を奪われた人たちが自己を表現する手段を身につけていくこと、教える者がそれを聴くことが識字に他ならないことを説いた。文字を学ぶことをとおして文字を持たない生活がどんなものなのかを社会に伝えることを識字運動として理論化した。識字は沈黙の文化に学ぶ活動としてみるべきだという。そうしないと文字を持つ者と持たない者の関係に優劣が生じ、識字のもつダイナミズムが喪失すると考えたのである。

サイレンシングはこうしてマクロに語られてきた諸課題と重なりながら、ミクロな関係性におけるこれらの過程を明らかにしていく概念なのである。いずれにしても暴力が対人関係へと浸透していく様を取り出すためには有益な言葉である。

なかむらただし(社会病理学/臨床社会学)

2015年8月25日受理